



患者さんの鼻くそ

〈大阪府〉 松本幸子 39歳

へその緒。それは、お母さんと赤ちゃんがつながっていた証し。親子の絆。桐の箱に収められ親から子へと贈り伝えられる宝物。

さながら次世代へとつなぐ命のバトン……。

「〇〇ベイビーのへその緒がなくなりまして」。朝一番の申し送りでの言葉を目にしたのは助産師2年目のときでした。それまでも何度か同じことがありました。しかし、ゴミ箱やオムツ入れの中を探せば必ず見つかりました。「きつと今回も出てくる」。根拠のない自信を抱きつつ、私たちはいつも通り業務をこなしました。「もう一度、病棟内を探し尽くしたけど見つからない」。夜勤者が看護師長に報告して

いるのを耳にしたとき、「大変なことになった」という思いと同時に、「手を尽くした結果だから仕方がない」と言い訳にも似た思いが複雑に交差しました。病棟全体が「仕方がないムード」に包まれていた午後、帰宅したはずの夜勤者の1人が疲れ切った表情で現れました。

「師長さん、やっぱり見つかりませんでした。すみません」。私は一瞬、状況が飲み込めずにいました。へその緒を諦めきれず、回収業者に連絡をし、ゴミ集積所に1人で出向いて探していたのです。看護師経験30年ぐらいのベテランさんでした。驚きを隠せない私の心を見透かしたように、すかさず師長は言いました。「例えそれが『鼻くそ』であったとし

ても、患者さんから預かった物は宝物のように大切に扱う。それが私たちの責任。母児、2つの命を扱う助産師の責任はもつと重たいですと……。

その言葉が意味する、目に見えない重圧に一瞬、言葉を失いました。「助産師を生きる覚悟」を決めた、まさにその瞬間でした。

ことし、助産師18年目を迎えます。「患者さんの鼻くそ」は、事有るごとに私があるべき方向へと導いてくれました。そして今、その覚悟を次世代へとつないでいきたいと願っています。さながら命のバトンのように……。

